「文化財保護国際会議　龍門石窟と関野貞」に参加して

渡辺 健哉

はじめに

2013年8月28日、厳しい残暑のなか、法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて「世界遺産に向きあい価値の共有を夢見た男　関野貞プロジェクト　文化財保護国際会議　龍門石窟と関野貞」が行われた。この「関野貞プロジェクト」発足の経緯は東京大学東洋文化研究所のサイトより「データベース」→「関野貞大陸調査と現在」→「プロジェクト立ち上げの経緯」に詳しい。これによると、人間文化研究機構の「日本関連在外資料調査研究事業」のサブプロジェクトとして「近代日本文化財保護政策関係在外資料の調査と研究」が立ち上げられ、そこで東京大学の東洋文化研究所と工学系研究科建築学専攻に保存されている戦前の中国調査の古写真やガラス乾板の整理を開始し、特に関野貞にスポットをあて、関連資料の整理と研究を行っているとのことである。すでにこのプロジェクトでは、「文化財保護と石碑の世界」（東京大学、2011年1月25日）、「関野貞資料と墳墓の世界」（東京大学、2011年3月2日）、「関野貞資料と都城の世界」（2011年4月20日）と題する学術シンポジウムをこれまでに行っていて、本会議もその一環として開催された。

本稿ではこの会議の模様を紹介しつつ、併せて古写真の資料的価値についても述べてみたい。ところで、本誌はタイトルに「13、14世紀」を冠している。それにもかかわらず本稿を執筆したのは、その時代の現存する石刻資料や文書を扱うにあたって、前世紀初めに撮影された写真も有益な資料になり得ると考えるからである。また、報告内容については出版する計画があるとのことなので、特に後半の「関野貞関係者の資料と現状」に比重を置いて紹介する。以上の二点について、あらかじめお断りしておく。

一　報告について

【龍門石窟院による報告】

午前9時30分、会議開始。総合司会は塩沢裕仁（法政大学文学部）が務めた。はじめに開会挨拶を本プロジェクトの代表である平勢隆郎（東京大学東洋文化研究所）が行った。

以下、龍門から参加した中国人研究者の報告内容を簡単に紹介していく。

李随森・趙虎龍（龍門石窟研究院、通訳は東海大学の吉田章人氏）「龍門石窟“世界文化遺産の至宝　帝室石刻藝術の典範”」：本来参加すべき李氏が都合により欠席したため趙氏単独の報告で、龍門石窟の概況を紹介するものであった。

焦建輝（龍門石窟研究院、通訳は東京大学の海老根量介氏）「龍門石窟百年の変遷――

関野貞教授が撮影した写真を例として」：まず龍門石窟について略述し、次に唐から宋に至るまでの詩文に龍門がどのように読み込まれてきたのかを紹介した。そして『支那文化史蹟』掲載の写真をスクリーンに提示しながら、現況を述べていった。

李曉霞（龍門石窟研究院、通訳は東洋文庫の宇都宮美生氏）「魏唐の宮廷内職と龍門石窟の仏教文化——龍門石窟の宦官開窟造像遺迹から」：本報告は宦官が石窟造営にどのように関わったのかを、題記から考察するものであった。その動機として、仏教信仰とともに自らの政治的立場を固めるためのものであったことを挙げた。ただし、会場からは地域差を考慮すべきではないか、といった疑問も呈せられ、筆者も唐一代をひとしなみに扱う分析には問題があるのではないかと感じた。

【関野貞関係者の資料と現状】

会議の後半は関野貞に関係する研究者の所持していた資料の現状について五人が報告した。

20 世紀初頭から 1945 年 8 月のアジア・太平洋戦争の終結までに、数多くの日本人研究者が東アジア各地の調査に赴く。そうしたなかで現在の中国研究者によって最も利用される頻度が高いのは、関野貞・常盤大定『支那文化史蹟』（法蔵館、1939-1941 年）であろう。今回の会議では、この『支那文化史蹟』に関連する資料の現況が紹介された。

まずは関野貞の略歴を紹介しておく。関野貞（1867-1935）は帝国大学工部大学造家学科（のちの東京大学工学部建築学科）を卒業し、内務省技師、奈良県技師、東京帝国大学工科大学助教授を経て、教授に就任する。東大を退官したのち、東方文化学院東京研究所の研究員となる。日本・中国・朝鮮の古建築史を専門とし、数多くの研究業績を残した[1]。

渡辺健哉（東北大学文学研究科）「常盤大定関連資料について」：常盤大定（1870-1945）は東京帝国大学文科大学哲学科を卒業し、真宗大学（のちの大谷大学、当時は東京にあった）教授、東京帝国大学文科大学印度哲学科講師を経て、教授に就任する。東大を退官したのち、関野と同じく東方文化学院東京研究所の研究員となる。真宗大谷派の僧侶としての活動も行い、若いころは清沢満之とも交流を持ち、後年には浅草本願寺の輪番を任じられる。専門は中国仏教史であるが、とくに儒・仏・道の三教交渉に関する研究の先駆者であった。関野とは『支那佛教史蹟』を共著の形で執筆し、関野が没したのち、他の成果も取り入れて『支那文化史蹟』を編集した。ここで筆者は宮城県仙台市の東北大学附属図書館や東北福祉大学附属図書館等に所蔵されている常盤が蒐集した拓本や蔵書等の現況について報告した。

関紀子（東京大学東洋文化研究所）「東京国立博物館蔵竹島卓一中国史跡写真について」：竹島卓一（1901-1992）は東京帝国大学工学部建築学科を卒業ののち、東方文化学院東京研究所の助手に任じられた。そののち名古屋高等工業学校を経て、名古屋工業大

[1] 関野の業績の全貌は藤井恵介（他）〔編〕『関野貞アジア踏査』（東京大学総合研究博物館、2005 年）に詳しい。

学教授に就任する。専門は中国建築史。主著に『営造法式の研究 1・2・3』（中央公論美術出版社、1970-1972 年）がある。東方文化学院在籍時の成果として、関野との共著『熱河 1・2・3・4』（座右宝刊行会、1934 年）があり、単著として『遼金時代ノ建築ト其仏像』（東方文化学院東京研究所、1935 年）がある。関野の中国調査には助手として同行し、関野逝去後も引き続き現地調査を行った。今回紹介された写真は、竹島の令嬢である池内節子氏が竹島逝去後に独力で整理を行い、2012 年になって東京国立博物館へ寄贈したものである。なかには調査時のスナップ写真も含まれており、そこから当時の調査方法なども窺うことができる。

川又正智（国士舘大学文学部）「国士舘大学における竹島卓一」：竹島は名古屋工業大学を定年で退職したのち、1965 年度から 1976 年度まで非常勤講師として国士舘大学で教育にあたった。ここでは、学生に対して熱心な指導をする竹島の一面を窺わせるノートや、学生を引率して奈良を訪れた際のスナップ写真なども紹介された。

日比佳代子（明治大学博物館）「明治大学博物館所蔵『島田正郎教授寄贈フィルム』について」：島田正郎（1915-2009）は東京帝国大学文学部東洋史学科を卒業し、北京に留学したのちに、東方文化学院の研究員に任じられている。専門は北アジア・東洋法制史。東京大学での同期に前田直典、田坂興道、そして関野の子息である関野雄がいた。のちに『支那文化史蹟』は満洲・内モンゴルの古写真を増補して『中国文化史蹟』として再刊されるが[2]、島田はその際に中心的役割を担った。日比氏によると、2011 年に岡野誠教授（明治大学法学部）より、段ボール 5 箱分に納められたスライドと戦前のネガフィルムの寄贈を受け、現在その写真を整理しているという。

飯塚彬（法政大学大学院人文科学研究科）「早崎梗吉資料について」：早崎（1874-1956）は岡倉天心の門弟として岡倉の調査に同行し、写真撮影を行った。報告では茨城県天心記念五浦美術館に保存されている早崎日記と早崎関係資料が紹介された。関野との関係でいうと、関野の長安調査において早崎と連絡を取っていたこと、そしてなにより『支那仏教史蹟』には早崎が所有しているものと同じ写真が利用されていることから、密接な関係があったと考えられている[3]。

すべての報告が終了したのち、前述した池内節子氏が参加されていたので、参会者に向けて挨拶を行った。現在、池内氏は竹島の写真と同じ構図の写真を撮影すべく、中国へ阿南ヴァージニア史代氏とともに調査に赴かれているそうである。

最後に天津大学の青木信夫教授より閉会の辞が述べられた。

以上の報告を聞いて、『支那文化史蹟』に掲載されている写真は、関野・常盤によって

---

[2] 『支那仏教史蹟』から『支那文化史蹟』を経て『中国文化史蹟』に至る経緯や、常盤自身の調査については、別稿で詳しく論じる予定にしている。

[3] 大西純子「中国旅行の日記について」（関野貞研究会〔編〕『関野貞日記』（中央公論美術出版、2009 年所収）、東京国立博物館〔編〕『清朝末期の光景——小川一眞・早崎梗吉・関野貞が撮影した中国写真』（東京国立博物館、2010 年）、塩沢裕仁「関野貞中国調査写真資料に触れて」（平勢隆郎・塩沢裕仁〔編〕『関野貞大陸調査と現在』（東京大学東洋文化研究所、2012 年所収）を参照。

撮影されたものだけではなく、それ以前に撮影された写真も含まれていることを改めて理解した[4]。そうした意味で『支那文化史蹟』はそれまでの日本人による中国調査の、いわば集大成的なものであったと位置づけることができよう。今回の会議により、『支那文化史蹟』に収斂されていく状況の一端が明らかになったので、紹介された写真の整理とそれを利用した研究が進むことにより、戦前の中国調査における東方文化学院東京研究所の果たした役割が明確になることは疑いない。

二　古写真の魅力、ならびに保全の緊急性

20 世紀初頭の国内外の調査において、写真機が利用されたことは画期的なことであった。中国に関していうと、我が国における東洋史学のパイオニアも貴重な写真を残した。『満洲写真帖』は、明治 38 年（1905）に中国東北部を撮影したもので、内藤虎次郎によって編集されている[5]。桑原隲蔵『考史遊記』に収録される写真も明治 40 年から二年間にわたる調査の記録である[6]。おそらく関野や常盤等が調査に赴いた 1920 年代であっても中国大陸でのカメラの普及率は低調だったと考えられるため、そこで撮影された写真は後世の研究者に貴重な情報を提供してくれる。本会議の内容にひきつければ、関野と常盤の関心が建築と仏教といった形で住み分けられたため、とりわけ多種多様な写真が残された。都城の風景、寺院建築、そして仏像、石窟、造像銘など、それぞれの目的に沿った形で撮影や資料収集がなされた結果、バラエティに富んだ資料が残されることになったのである。これまでも写真の出版などは行われてきたが、今回の会議をきっかけとして、関野と常盤さらには竹島や島田による戦前の中国調査の実態がより明らかになることにより、これまでとは次のステップに進んでいくのではないかと期待される。

では、こうした現代に残された写真は我々の研究にどのように活用することができるのであろうか。以下に思いつくままにあげていく。

真っ先に考えることは現状との比較と思われる。すでに平勢隆郎氏と塩沢裕仁氏が共同で着手し始め、その成果の一端を web 上で公開している[7]。古写真はいまから約 100

---

[4] 写真の撮影に携わった人々については、前註塩沢裕仁「関野貞中国調査写真資料に触れて」、塩沢裕仁・平勢隆郎「関野貞の『支那歴代帝陵の研究』を支えた人々——竹島卓一・荒木清三・岩田秀則」（『法政史学』79、2013 年）を参照。

[5] 『満洲写真帖』は明治 41 年に東陽堂から出版され、のちに『内藤湖南全集（6）』（筑摩書房、1972 年）に収録されている。

[6] 『考史遊記』は桑原没後の昭和 17 年（1942）に弘文堂から公刊されたが、その際に写真が収録された。本書には霊巌寺や元の上都の写真が挿入されている。『桑原隲蔵全集（5）』（岩波書店、1968 年）に収録されている。のちに岩波文庫の一冊として刊行された際には、全集版から割愛された索引が復活している（岩波書店、2001 年）。

[7] 東京大学東洋文化研究所のサイトより「データベース」→「関野貞大陸調査と現在」→「関野貞大陸調査」を参照。なお、平勢隆郎「関野貞大陸調査と古写真」（『明日の東洋学（東京大学東洋文化研

年近く前の風景を撮影しているために、現状と比較すると、まったく異なる景色になっている。そうした現状との比較を積み重ねながら、次に我々の研究に生かしていく方法を模索する必要があろう。なお、このことは遺跡の保全にも関わってくることはいうまでもない。

次に石碑の写真からは、石碑の立っていた周囲の環境や大きさを確認できる。周囲の環境については、石碑をどのような形で見せたいのか、立碑者の意識まで我々に想像させる[8]。まして当該の石碑が時間の経過に伴って博物館等に収蔵された場合にあっては言うまでもない。さらに石碑や石像、そして塔の写真には人物が写り込んでいる場合が多い。これは単なるスナップとしてではなく、人間をスケール代わりに見立てる意図もあったと想像される。【図１】には常盤大定自身が写っている。また、【図２】を見ることで石碑の巨大さを実感できる。さらに写真を丁寧に見ていくと、当時の調査風景まで窺い知れる点も興味深い。例えば、【図３】は雲門山の遠景であるが、左図を拡大した右図（第一龕）を見ると、採拓している人間と仏像に向かって調査を行っている人間の姿がはっきりと確認できる。このように、写真から明らかになることは数多い。

加えて、彼らの几帳面さが古写真の史料的価値を大いに高めている。つまり、他の記録と突き合わせることで写真の撮影時期が判明する。たとえば、常盤の調査記録は、常盤大定『支那佛蹟踏査――古賢の跡へ』、同『支那佛教史蹟』、同『支那佛教史蹟記念集』、以上をまとめた同『支那佛教史蹟踏査記』として出版されている[9]。これらと写真とを照合することにより撮影時期を細かく特定することが可能になる。

ただ一方で急務ともいえるのが、こうした写真資料の保全である。写真を撮影した当時には想定さえしなかった事態、すなわち写真の経年劣化がすでに始まっている。写真を焼き付けた印画紙も経年によって劣化するし、その原板ともなるフィルムやガラス乾板にいたるや、すでに耐用年数が近づきつつあるといってよい。当然、温度・湿度が一定に管理された最適の保存方法が施されていれば、一定程度の維持は可能であろうが、それでもいずれ限界はおとずれる。そもそもガラス乾板にいたっては物理的な破壊をうけてしまえば、一瞬のうちに消滅してしまう。想像もつかない時間や経費も必要になっ

究所附属東洋学研究情報センター報)』30、2013 年）では、ガラス乾板やフィルムといったいわゆる原板の所在が大陸調査にどのように絡むのか、また写真の版権問題にまで触れている。古写真の版権についても、今後は注意していかなければならないであろう。なおこの文章では、古写真の学問的位置づけについても的確に述べられている。本稿と併せて参照されたい。

[8] こうした石碑そのものについて、舩田善之氏が「石刻の構造・大小をめぐる問題」「石刻の配置をめぐる問題」という興味深い二つの問題を設定し、写真とともに論じている。舩田善之「石刻史料が拓くモンゴル帝国史研究――華北地域を中心として」（吉田順一〔監修〕・早稲田大学モンゴル研究所〔編〕『モンゴル史研究――現状と展望』明石書店、2011 年所収）を参照。

[9] 常盤大定『支那佛蹟踏査――古賢の跡へ』（金尾文淵堂、1921 年）、同『支那佛教史蹟』（同、1923 年）、同『支那佛教史蹟記念集』（佛教史蹟研究会、1931 年）、同『支那佛教史蹟踏査記』（龍吟社、1938 年）を参照。

てくるため、ただちに解決できる問題ではないが、写真に関する専門家の協力を仰ぎながら、資料の保全は緊急に進めていかなければならない。

おわりに

以上、学会の参加記ととりとめのない感想を記してしまった。読者の所属する機関（大学、図書館等）にも古写真が所蔵されているかもしれない。それらはいずれ耐用年数を迎えるため、歴史的記録として保存する以上、何らかの対策を緊急に考慮する必要がある点だけは再び注意を喚起しておきたい。

最後に会場の雰囲気を述べておく。当日は国内外の研究者のみならず一般の参加者が多数参加されていた。当然、世界遺産である龍門石窟への関心からであろうが、古写真への反応の高さもまた報告をしながら実感した。今後、こうした古写真への関心が広く高まることを期待したい。

〔付記〕

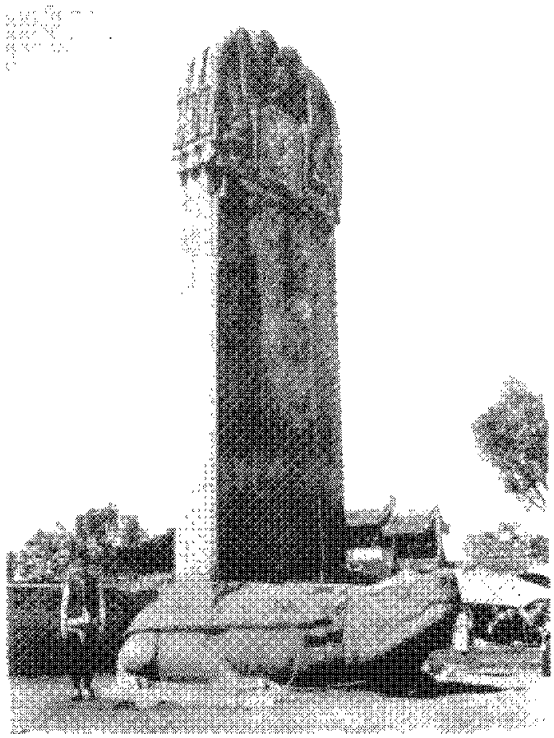
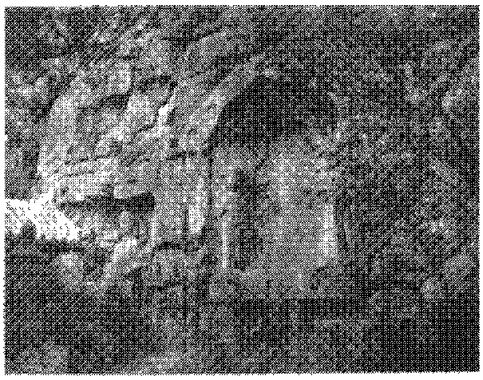
本会議で報告するにあたり、大会事務を取り仕切られた塩沢裕仁先生にはとてもお世話になった。また平勢隆郎先生には東洋文化研究所に保存されている写真資料を自ら案内していただいた。以上に加え本稿を草するにあたってもご意見を頂戴した。末尾ながらお二人の先生には心から御礼申し上げたい。

（わたなべ　けんや、東北大学）

※以下の写真はすべて『支那文化史蹟』より引用

【図１】7-16 霊巌寺 歴代住持墓塔

【図２】8-98 唐清河郡王紀功碑（河北・正定）



【図３】7-71 雲門山第一龕及び第二龕（右図は左図を拡大したもの）